

2015 年度

事業報告書

2016 年 5 月 30 日



目次

I. 法人の概要	3
II. 長浜バイオ大学事業報告	5
【1-1】教育活動（学部）	5
【1-2】教育活動（大学院）	7
【2】研究支援活動	8
【3】学生生活支援活動	10
【4】就職支援活動	12
【5-1】学生募集	20
【5-2】高大連携推進事業活動	23
【6-1】学習・就業力支援活動	24
【6-2】長浜市内拠点活動	27
【7】教育・学術情報センター活動	27
【8】IR活動	31
【9】施設整備等	32
【10】長浜バイオ大学保護者会	33
【11】長浜バイオ大学同窓会	33
【12】京都高齢者大学	33

I. 法人の概要

1 設置する学校・学部・学科・研究科

長浜バイオ大学	大学院	バイオサイエンス研究科
	バイオサイエンス学部	バイオサイエンス学科
		アニマルバイオサイエンス学科
		コンピュータバイオサイエンス学科

2 当該学校の入学定員・入学数および収容定員・在籍数の状況（2015年5月1日現在）

【大学院 バイオサイエンス研究科】

○ 博士課程前期課程

入学定員	36名
入学数	47名

1～2回生の収容定員	72名
在籍数 1回生	49名
在籍数 2回生	29名
計	78名

○ 博士課程後期課程

入学定員	5名
入学数	7名

1～3回生の収容定員	15名
在籍数 1回生	7名
在籍数 2回生	7名
在籍数 3回生	3名
計	17名

【バイオサイエンス学部】

● バイオサイエンス学科

入学定員	148名
編入学定員	4名
(3年次生時)	
入学数	191名

1～4年次生の収容定員	600名
在籍数 1年次生	192名
在籍数 2年次生	191名
在籍数 3年次生	187名
在籍数 4年次生	175名
計	745名

※在籍者数には留年生を含む

● アニマルバイオサイエンス学科

入学定員	50名
入学数	55名

1～4年次生の収容定員	200名
在籍数 1年次生	60名
在籍数 2年次生	62名
在籍数 3年次生	50名
在籍数 4年次生	54名
計	226名

※在籍者数には留年生を含む

● コンピュータバイオサイエンス学科

入学定員	40名
入学数	37名

1～4年次生の収容定員	160名
在籍数 1年次生	38名
在籍数 2年次生	50名
在籍数 3年次生	37名
在籍数 4年次生	47名
計	172名

※在籍者数には留年生を含む

3 役員・教職員の概要 (2015年5月1日現在)

＜役員＞	理事	9名
	監事	2名
	計	11名

＜教職員＞	教員	66名（教授25名、准教授16名、講師5名、助教1名、助手19名）
	職員	44名
	計	110名

4 建学の理念・教育目標

本学は、前身である京都人文学園から受け継いだ、「平和とヒューマニズムを何よりも尊び、豊かな人間性と科学的合理性を兼ね備えた『行動する思考人』の育成」を教育理念としています。

5 法人の沿革

2002年 12月 19日	学校法人関西文理総合学園認可
2002年 12月 19日	長浜バイオ大学バイオサイエンス学部バイオサイエンス学科認可
2003年 4月 1日	長浜バイオ大学開学
2006年 11月 30日	長浜バイオ大学大学院バイオサイエンス研究科認可
2007年 3月 31日	長浜バイオ大学バイオサイエンス学部完成
2007年 4月 1日	長浜バイオ大学大学院バイオサイエンス研究科開学
2009年 3月 31日	長浜バイオ大学大学院バイオサイエンス研究科博士課程前期課程完成
2009年 4月 1日	長浜バイオ大学バイオサイエンス学部アニマルバイオサイエンス学科開設 長浜バイオ大学バイオサイエンス学部コンピュータバイオサイエンス学科開設
2010年 3月 31日	長浜バイオ大学大学院バイオサイエンス研究科 博士課程後期課程完成
2013年 3月 31日	長浜バイオ大学バイオサイエンス学部アニマルバイオサイエンス学科完成 長浜バイオ大学バイオサイエンス学部コンピュータバイオサイエンス学科完成
2015年 4月 1日	長浜バイオ大学バイオサイエンス学部内に臨床検査技師養成プログラムを設置

Ⅱ. 長浜バイオ大学事業報告

【1-1】教育活動（学部）

長浜バイオ大学では、教育の質を保証するため、ディプロマポリシー（学位授与方針―卒業までに身につけるべき能力）、カリキュラムポリシー（教育課程編成・実施方針）を定め、2014 年度入学生から新しく教育プログラムとしての新カリキュラムを編成した。2015 年度は、新カリキュラムを 1 年次ならびに 2 年次に適用した。

また、2013 年度以前入学生（3 年次生、4 年次生）に対しては、現行のカリキュラムを適用し、その実施に当たっては、専門知識、技術を系統的に教授するとともに、幅広く深い教養及び総合的な判断力を培い、豊かな人間性を涵養することにより、長浜バイオ大学の学士にふさわしい人材の育成を図った。

1 学部卒業生数

2015 年度、開学 13 年目、新学科設立 7 年目、設置した教育課程に基づき、学生の履修登録とその指導、定期試験と成績評価、進級判定、卒業判定に係る業務を行い、2016 年 3 月 19 日、以下の卒業生を送り出した。

2015 年度学部卒業生数	252 名
バイオサイエンス学科	159 名
アニマルバイオサイエンス学科	53 名
コンピュータバイオサイエンス学科	40 名

2 新カリキュラムの実施

2014 年度教育改革の取り組みとして、学士課程教育の質保証をめざし、教育プログラムをベースとした新カリキュラムを構築し、2 年目の実施を行った。

（1）3 学科の教育プログラムについて、2015 年度入学生に十分な説明を行った。

①バイオサイエンス学科

「創薬・機能物質プログラム」

「環境・植物制御プログラム」

「遺伝子・細胞新機能プログラム」

②アニマルバイオサイエンス学科

「アニマルバイオサイエンスプログラム」

③コンピュータバイオサイエンス学科

「情報生物学プログラム」

「医療情報技術プログラム」

（2）新カリキュラム実施 2 年目、2015 年度入学生には学部共通一般教育プログラムを中心として教養教育、基礎教育を、2014 年度入学生は学部共通専門コアプログラムを中心に学際的な専門科目教育を行った。

3 JABEE 認定に向けた取り組み

3 学科の新カリキュラムは、JABEE 教育課程として「バイオサイエンスコース」「アニマルバイオサイエンスコース」「コンピュータバイオサイエンスコース」の 3 コースとして設定し、それぞれに学習・教育目標を設けると同時に、成績評価に関わる基準を明確にした。新カリキュラムは、(社) 日本技術者教育認定機構予備審査の申請を行い 2015 年 3 月に JABEE 課程の暫定認定を受け、2018 年度本審査認定の受審を目指すことになる。なお、本学の JABEE 履修審査基準に基づき 2015 年度生で JABEE の教育課程履修を許可した者は、186 名となり、2014 年度生 JABEE 履修生 215 名と合わせて全体で 401 名となった。

4 臨床検査学プログラムの開始

2015年度入学生より臨床検査学プログラムを開始した。臨床検査学プログラムについては「臨床検査学ワンポイントセミナー」を4月から5回実施、「臨床検査学プログラム説明会」を9月と2016年1月の2回実施し、学生に十分な説明を行った。プログラムへの配属は、2016年2月に申請を受付け（35名）、3月中旬に面接を実施して臨床検査学プログラム履修生27名を選考した。

5 実験動物技術者資格取得に向けた取り組み

本学は、日本実験動物協会から実験動物技術者受験資格認定校の資格を受けており、在学中に実験動物技術者認定試験を受験することができる。アニマルバイオサイエンス学科では、2012年度より実験動物技術者試験対策を行っており、2015年度は1級2名、2級30名の合格者であった。

6 語学力強化に向けた取り組み

本学の教育目標の一つとして掲げている「語学力の向上」の実現を図るため、クラス編成テストと期末テストにTOEICテストを導入している。2015年度においてもTOEICテストの成績データを基に学力到達度別クラス編成を行い、教育効果の高い授業を行うことができた。さらにTOEICのデータを分析することで本学英語教育の課題を発見し、教育内容の改善に繋げている。

7 主体的な学びを育成

主体的な活動を通じて自立的行動規範を身につけることを目的として、「バイオ実験夢チャレンジ」をカリキュラムに配置し1年次生から適用した。学生が主体的にバイオサイエンスを学ぶ力の育成を図った。

また、キャリア教育では、社会で生き抜いていくための力や社会に出て働くために必要となる力の育成を図っている。

8 F D活動

教員個人の教育力を高めるため、また、組織的な教育力を高めるために以下のF D活動を行った。

- (1) 関西F D連絡協議会主催のF D研修会への参加
- (2) 関西F D連絡協議会共催のF D研修会の開催
- (3) 海外F D研修（カリフォルニア・デービス校）へ参加
- (4) 「本学に相応しいアクティブラーニング」WGを下部小委員会とし、アクティブラーニング導入を推進するための具体案の検討

9 教育支援（前年度からの継続）

1年次基礎実験、2年次応用実験、3年次専門実験にT Aを配置し、本学の基幹科目である実験・実習教育において教育効果の向上を図った。また、T Aは大学院生への経済的支援という目的もあるが、T Aとなる場合は、自らの研究活動に支障をきたすことがないよう、原則、定められた制限以下になるよう配置した。

また、受講生数が多い講義科目においては、S Aを導入し、教育支援を行った。

【1-2】教育活動（大学院）

2013 年度、大学院のディプロマポリシー（学位授与方針）、カリキュラムポリシー（教育課程編成・実施方針）を定め、博士課程における人材育成目標をより鮮明にした。

バイオサイエンス研究科博士課程前期課程では、教育・研究を通してバイオサイエンスの知識に裏打ちされた問題発見解決能力と自然に対する崇高な倫理観を持ち、社会を支え国際社会でも活躍しうる人材育成を目指している。

バイオサイエンス研究科博士課程後期課程では、バイオサイエンス分野における高度の知識と技術を習得し、人々の福祉と幸福の向上に貢献する様々な分野で指導的役割を担うことのできる高い能力を持った研究者、技術者および教育者の育成を目指している。

2015 年度は、上記の方針に基づき、以下の教育を行った。

1 大学院開設 9 年目、以下の修了生を送り出した。

2015 年度博士課程前期課程修了生	23 名
2015 年度博士課程後期課程修了生	1 名

2 博士課程前期課程の修了要件

2014 年度博士課程前期課程入学生より、修士課程修了にふさわしい質を保証するため、修了要件を追加した。教員の適切な指導の結果、対象者は全員修了要件を満たすことができた。また、修了要件の一つである学会への参加を促すために、学会参加費を補助する制度を設けた結果、2014 年度生は 46.4%、2015 年度生は 27.1%の利用となった。

3 大学院の新カリキュラム検討

＜博士課程前期課程＞

バイオサイエンス研究科博士課程前期課程では、国内外における大学院生の将来の活躍に資するために、より良い視野にたつ思考力とプレゼンテーション能力を涵養していくことを目的とし、2016 年度から実施するアクティブラーニングを基盤とした演習科目を検討した。

＜博士課程後期課程＞

博士課程後期課程については、より高い到達点を目指すために、夏期集中形式で英語によるプレゼンテーションやディベート能力を重視した修了要件を付加する新カリキュラムを検討した。

4 研究室のHP立ち上げの取り組み

本学大学院への学外からの志願者を増やすことを目的として、研究室全てのHPを立ち上げ、公開する計画を立てたが、年度末の段階で36研究室中13研究室が公開されているだけである。全研究室で公開できるように、次年度に継続していく。

5 連携大学院の取り組み

タカラバイオ株式会社（以下、「タカラバイオ（株）」）との協定に基づく連携大学院の取り組みを継続した。タカラバイオ（株）の指導を受けた院生はいなかったが、タカラバイオ（株）の研究者2名を本学の客員教員として任用し、学部、大学院での講義を担当してもらった。

【2】研究支援活動

1 外部資金の獲得

(1) 申請書作成支援

本学教員を講師に迎え、科研費申請書作成講習会を開き、申請書の書き方の直接的指導をした。また、科研費、JST および各種財団へのほとんどの申請書の内容と形式のチェックを研究推進機構事務室で行った。

2015 年度は、科学研究費 8 件および JST2 件の新規採択を得た。教員主導による企業との新規の共同研究・開発件数は 4 件であった。また、企業より 2 件の研究活動への寄附もあった。これらの結果、新規の採択、継続分および共同研究等による本年度の外部資金の受け入れ総額は 1 億 7966 万円であった。

(2) 学内共同研究助成制度と研究助成制度の充実

学内共同研究助成 4 件と研究助成制度 5 件を採択し、研究費総額 1,000 万円の支援をおこない、学内研究の推進を図った。助成を受けた教員 13 人の内 4 人が 2016 年度の科学研究費を獲得し、本助成の効果が見られた。

2 知的財産

本年度は 4 件の特許の登録（成立）が行えた。共同出願も含め 4 件の新規出願をおこなった。また、特許の企業への有償譲渡が 2 件行えた。

3 外部との共同研究の推進

(1) 技術導出活動：蛍光法による高感度ウイルス検出装置

蛍光標識抗体を混ぜるだけで、100 粒子程度のウイルス・細菌を 10 μ L 以下の検体から 5 分以内に検出できる分析技術を本学教員が開発した。この技術シーズをバイオ機器メーカー（埼玉県）に導出した。現在、製品プロトタイプを製作、複数の公的研究機関・大学等の支援を受けて臨床研究支援等の用途での性能評価を行っており、2～3 台が試験的に埼玉大学およびあるベンチャー企業（埼玉県）に導入された。学会や展示会での参考出品も継続的に行っており、確実に実用化に近づいている。

(2) 技術導出活動：金属メッシュデバイスバイオセンサーの開発

世界で初めて微量物質の簡易検出を実現できる「金属メッシュデバイス」の用途開発を滋賀県に事業所を持つ電子機器メーカーと共同で本学教員が進めている。この技術は、メッシュ状の微細構造を持つ金属薄膜の電磁波応答性から、付着した被検出物の有無や量を簡単に短時間で知ることができる。また、さまざまにデザイン可能なマイクロメートルオーダーの微細構造を利用し、大きさによって物質を分ける篩（ふるい）としても活用可能である。PM2.5 や癌細胞、微生物の検出と分離に威力を発揮することが期待される。現在、細胞分画用の機能材料として、当該電子機器メーカーよりビジネスモデルの構築が進められており、数年以内の実用化が見込まれている。

2015 年 12 月より、JST シーズ育成研究の採択を受け、本シーズの微粒子サイズ分画性能を活用した細胞分離技術およびそれを利用した細胞培養装置の開発研究を当該電子機器メーカー、九州大学および本学が共同で進めており、本学教員が全体の研究責任者、当該電子機器メーカーが企業責任者を担当している。

(3) 技術導出活動：医薬品開発

医薬品開発テーマの研究が本学教員により進められた。JST の A-STEP 顕在化タイプに国内製薬企業と共同申請し採択され、共同研究を 2015 年 2 月より開始し 2016 年 3 月まで実施した。このテーマの元となる基本特許が 2016 年 4 月に日本で成立したので、今後企業への導出活動に注力する。

(4) 技術導出活動：地元企業との植物工場での栽培法の開発

本学教員が長浜市の企業と各々植物工場内で栽培植物の有用物質含量（ツブリナが有

する脂肪代謝促進に関わる成分及び、企業が着目するあるハーブのある成分）を向上させるための栽培方法の共同研究を行った。有効成分の含量の高い作物が育てられるようになり、植物工場で栽培する作物の付加価値を向上できた。

(5) 技術導出活動：植物の生育促進法開発

企業と本学教員の共同研究である。企業が着目するある物質の植物に対する生育促進作用機構の解析を行った。効率的な植物生育法、さらには新規な肥料原料の開発につながる課題である。

4 ビジネスフェア

びわ湖環境ビジネスメッセのビジネスフェアに出展した。来訪者はモノづくり企業が多く、本学のシーズと異なる分野でビジネスを行っているので、マッチングの機会は小さい。

5 地域支援

(1) 滋賀バイオ産業推進機構（SBO）

学から滋賀県企業に向けた新しいアグリビジネスの紹介、また企業から学にむけた事業紹介をおこない、産学の連携に基づく滋賀県における新たなアグリビジネスの創出を目指している。本年度は、本学教員1人が講師に招かれ、本学での研究内容を企業に紹介した。本学教員は本機構の理事を務め、機構の運営でも貢献している。

(2) バイオビジネス創出研究会

大学の正面に位置する長浜バイオインキュベーションセンターを活動拠点として、本学のシーズ技術を基に新たなバイオ産業を長浜市に創出するために作られた会。本学教員は、この会に問い合わせられる技術相談などの解決に寄与した。2015年度にインキュベーションセンターに入居した企業と本学教員間での共同研究が新たに開始された。

(3) 滋賀バイオプロジェクト創出サロン

滋賀バイオ産業推進機構とバイオビジネス創出研究会が共同で運営する会。本学教員が運営委員長を務めている。バイオ分野の大学シーズを地元企業に紹介し、大学と企業のマッチングを目指している。この会の特徴は、少人数でセミナーを開催し、企業人と大学教員とが密に相談できる場を提供していることである。本年度本学教員2人が講師を務めた。

(4) アグリビジネスカフェ

バイオビジネス創出研究会が立ち上げた会で、最新のアグリビジネス、植物の知識の普及に努めている。昨年度に引き続き、本学教員が講師を務め数回にわたり農家向けに、植物に関する勉強会を開き、農家の基礎的能力の向上に努めた。

(5) 長浜アカデミックサポートチーム（NAST）

バイオビジネス創出研究会が立ち上げたチームで、バイオ、医療、環境等に優れた知見を有する教10人を中心としたユニークな組織である。清水委員長の死去に伴い、新たに三輪学長が委員長に就任された。本学教員4人が参加し、長浜市での新たなバイオ産業創出に努めている。委員の高い専門性に基づき、企業からの技術相談や、企業への移転可能なシーズの提案を行っている。この会の活動については、長浜市役所から高い評価を得ている。

(6) 長浜バイオクラスターネットワーク

「長浜バイオクラスターネットワーク」の運営協議会に参加し、地元企業の技術相談や、新商品開発への助言を行った。本活動は地域支援の中核である。

(7) ビワマスの餌開発

長浜市役所の支援を受け2012年より本学教員を中心として研究を開始し、脂ののりのよいビワマスを育てる餌を開発した。本年度は長浜市の養殖業者と共同でこの餌を用

いて、脂ののったおいしいビワマスを生産出荷する予定であった。しかし、養殖用に県の水産試験場より購入した稚魚の多くが、正しく作られた3倍体ではなく、残念なことに2倍体であったので、秋に卵巣もしくは精巣が発達し、成長が止まると共に、味落ちをしてしまい商品価値がなく、出荷できなかった。

一方、本学では、ビワマスの脂肪の分布をCTでより正確に可視化する方法が検討され、ビワマス体内の脂肪分布を正確に測定できるようになった。

2016年度、本学、長浜市役所とビワマス養殖業者と共同研究契約を締結し、産官学共同で給餌法の開発を進める。醤油油添加餌の給餌時期を検討し、効率的に筋肉に脂を入れる方法を見出し、美味しいビワマスの効率的生産方法を確立する。

(8) カスミサンショウウオの保全活動

絶滅危惧種であるカスミサンショウウオが本学の近くの田村山に生息している。本学（教員・学生）、地元企業、地元自治会、小中高校生が協力して保護組織「田村山生き物ネットワーク」を立ち上げ、この種の保全活動を行っている。活動を行うなかで、種の保全のみならず、環境の保全をどう行うかを参加者が自ら考え、地域の自然環境保護に積極的にかかわるようになることを目指す。本年度は以下を実施した。

- ・造成した保全用池へのこの種の定着の調査、また外敵調査・排除作業
- ・田村山清掃活動への参加
- ・ボーイスカウト（多賀町・犬上一団）へのカスミサンショウウオ調査の指導
- ・長浜ツーデーマーチ、滋賀県森づくり交流会ふれあいフェスタに参加して、啓発及び保護活動の紹介
- ・田村山周辺水路の希少水生動物の調査とその調査結果の教育機関への周知、更に自然環境の保護計画策定
- ・㈱ダイフク滋賀営業所・生物多様性シンポジウム講師及びパネリストとし参加、保護活動の紹介と指導
- ・「田村山生き物ネットワーク」報告会開催（高校生・大学生・他の環境保全団体（山門水源の森を次の世代に引き継ぐ会）取り組みの発表を含む）
- ・SAVE JAPAN プロジェクト（損保ジャパン）の協力のもと、外部からも参加者を募りサンショウウオの卵調査・観察会の実施
- ・これまでの保護活動をまとめた冊子の自主作成、地域住民（寺田町自治会など）への説明会実施と冊子の無料配布
- ・田村山および県内のカスミサンショウウオ繁殖地の探索と遺伝子調査、それに基づく保全計画策定
- ・琵琶湖博物館・彦根市稲枝北小学校の要請によりカスミサンショウウオ繁殖地の探索
- ・米原市番場ビオトープ協議会参加・助言
- ・大阪市自然史博物館にて保護活動および研究成果の講演
- ・日本爬虫両棲類学会で保護活動および研究成果の発表

【3】学生生活支援活動

1 フレッシュアップキャンプ

新入生全員を対象に、オリエンテーション日程において1泊2日の合宿形式で「フレッシュアップキャンプ」を実施した。これは、新入生が大学生活に早く適応するために、a) 新入生同士の友人作り、b) 教員との交流、またc) 新入生と在学生との交流機会を提供すること、さらにd) 地域社会での魅力も体感することを目的にしている。新入生は99%が参加し、アンケート集計からも上記目的が達成された結果となっている。地元ホテルを利用して、長浜の街を散策する企画も盛り込み、新入生同士の仲間意識を醸成することは勿論、大学・地域社会への帰属意識を高めることに大きく寄与している。

2 経済的支援（奨学金・学費減免措置）

（1）「家計急変奨学金」

「経済的な理由」により、学業を継続するのが困難になる学生の特別支援策として「長浜バイオ大学家計急変奨学金」制度を設けており、2015年度は計6名（前期2名、後期4名）に支給した。

（2）「学費支援奨学金」

大学創立10周年記念募金を基金として、2015年度より新たに創設した。本制度は、修学の意志があるにも関わらず、家計状況により修学が困難な学生を経済的に支援するために、従来の「家計急変奨学金」基準に該当しなかった学生を支援することを目的とする。2015年度は計6名の学生に支給した。

（3）学内奨学金の充実・発展

日本人学生および留学生を支援するために、引き続き学内規程にもとづき以下の奨学金を継続実施した。

①留学生対象（大学院・学部生）

1. 入学金免除
2. 授業料の50%減免措置
3. 学内奨学金支給

②日本人学生対象（大学院・学部生）

- （a）入学試験による特別奨学金支給
- （b）学内奨学金支給
- （c）大学院入学金免除

（4）サポーター奨学金制度

企業からの「サポーター奨学金」へのご協力により、2015年度も就学意欲がありかつ成績優秀者を対象に経済的支援を継続実施した。

3 表彰制度の確立

優れた研究、社会貢献をした学生を対象とする「長浜バイオ大学学生表彰要綱」に基づき、2015年度は6件の団体・個人に表彰を行った。

4 留学生の修学支援

「留学生修学サポートプログラム」として引き続き、①留学生相談室の開設や留学生支援スタッフの配置、②レポートや論文作成における日本人学生によるチューター制度、③入学後の履修や生活面支援のピアチューターの活用、④大学内や地域での国際交流イベントへの参加等、支援策を実施した。留学生同士の交流はもとより、留学生と日本人学生との交流を活性化するなど、留学生の定着に寄与した。

5 学生相談への支援強化

学生の多様化、学生を取り巻く環境の多様化に伴い、学生生活での人間関係やこころの相談など、学業を継続するために「こころ」のケアの必要な学生が増加傾向にある。2015年度は開講期間中に週2日、「学生相談室(カウンセリングルーム)」で臨床心理士のカウンセリングを実施した。新入生オリエンテーションでの周知、「学生相談室だより」の発行などのPRも奏功し、前年に比べて新入生を中心に相談来室者が増加した。相談内容は、個別ニーズはじめ休学や退学の可能性ある学生の相談対応はもとより、ケースによっては他部署(教務担当、就職・キャリア担当、学習支援担当)と

の連携を図りつつ学生支援を実行することができた。教職員研修を実施したことも、教職員間の連携を促進する契機となった。また学生のケアのみならず、保護者の相談にも対応したこと、学生への日常対応で悩みを抱える教職員からの相談要請にも対応できたことは成果である。

6 障害者への教育支援

近年は、学生相談室・学生担当を中心にメンタルヘルス面で複数の発達障害学生への支援を実施しており、本人の特性に合わせた対応を行っている。2015年度においても関連部署の連携・協働を図りながら、発達障害学生に対して大学として実行可能な支援を行った。

2016年度より「障害者差別解消法の合理的配慮規定等」が施行されることに備えて、新たに障害学生支援委員会を設置して全学的に支援できる体制が整備された。

【4】就職支援活動

本学の就職支援は、ディプロマポリシーに基づいた教育活動を通して学生の自己成長を促しながら、就職活動開始前までに学生を育成していくことを重視している。そのため、カリキュラムポリシーによる教学指導、就業力育成支援をはじめとしたキャリア教育との連携強化を図りながら、学生と企業との適切なマッチングを促進できるように取り組みをすすめている。また、その成果目標としては、高い就職実績と就職先への満足度の向上を図り、社会的評価を受け学生募集に貢献できるよう努めている。

特に2015年度就職支援に於いては、採用選考スケジュールが大幅に変更されたことで、採用選考全般の動向が不透明な要素が多く、就活準備時期やスタート時での学生の不安が例年以上に高く、従来の①業界・企業研究、②就労意識の涵養、筆記試験・書類対策、③面接対策、④その他個別就職支援の4つの項目を重点とした対策講座に加えて、個別指導を中心とした特別講座を多く開講するとともに、就職活動期間が長期間になったため適時の「励まし」を含めた個別相談による支援の強化を重視した。

1 学部生・大学院生の就職決定状況と就職活動支援

学部第10期生の就職決定率は96.0%(決定者168名/希望者175名/前年度決定率93.1%)、

また大学院博士課程前期課程第8期生の就職決定率は100.0%(決定者16名/希望者16名/前年度決定率96.7%)であった。また、16年卒業生アンケートの決定先についての満足度も94%(前年満足度90%)と上昇した。就職決定企業内訳の詳細は下表参照。

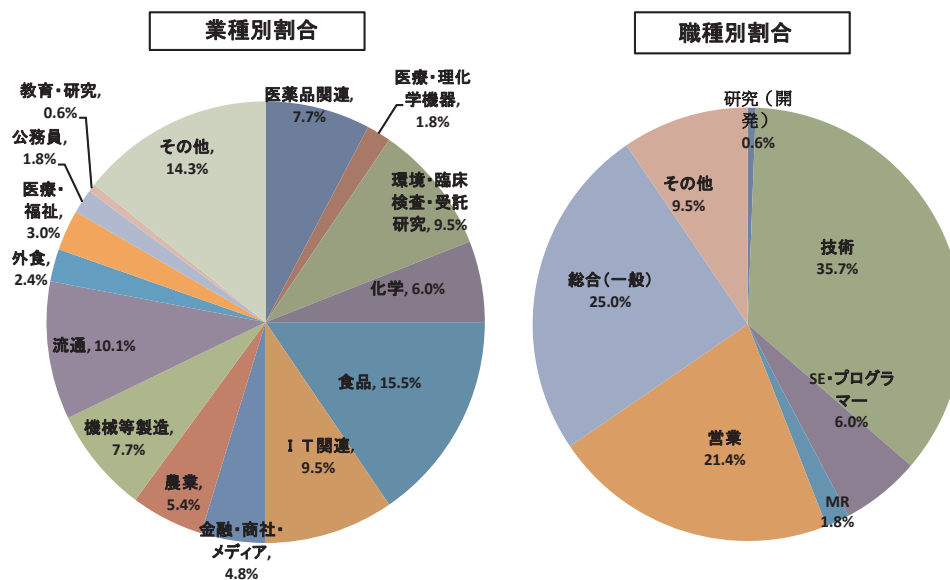
2016年卒向け求人受付数は、合計8,370件(対前年比120.3%)で、前年好転した採用環境が今年度も継続し、数年抑制傾向が続いていた製薬・化学・食品などの製造業でも求人受付数が増加した。また、求人期間の長期化により10月以降での未内定学生も継続して旺盛に就職活動を継続することができ、大学としての支援も最後まで積極的に行うことができた。

学部 第10期入学生

卒業者数	238
大学院進学者	56
その他の進学者	14
就職決定者	168…(a)

就職希望者	175…(b)
就職決定率	96.0…(a)/(b)

学部第10期生の就職決定企業内訳

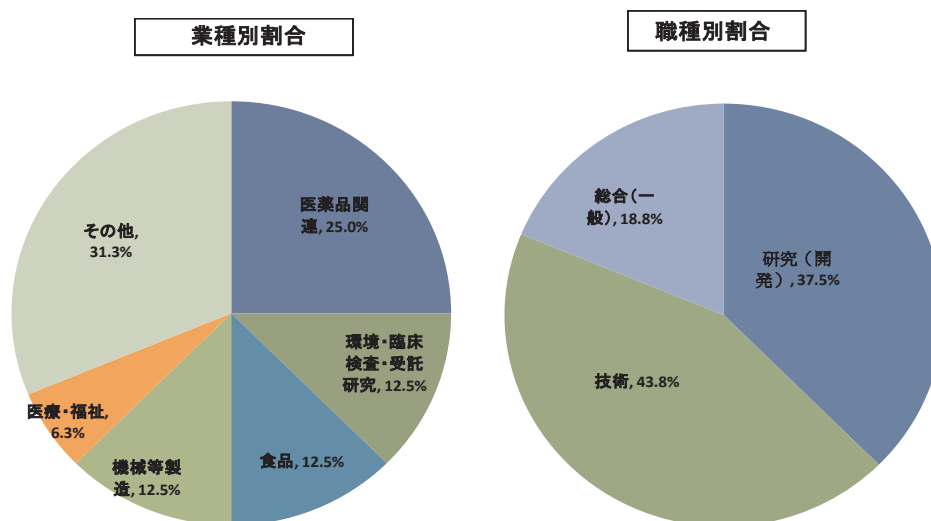


大学院博士課程前期課程 第8期入学生

修了者数	22
大学院進学者	5
その他の進学者	1
就職決定者	16…(a)

就職希望者	16…(b)
就職決定率	100.0…(a)/(b)

大学院博士課程前期課程 第8期生の就職決定企業内訳



(1) 個別面談の強化

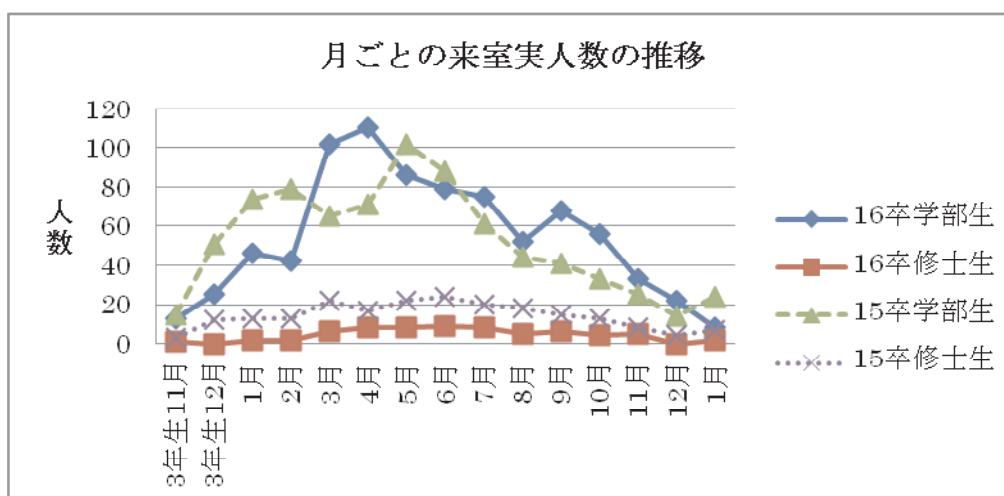
(a) 個別面談の強化と組織的な就職支援の展開

就職・キャリア担当スタッフとキャリアカウンセラーとが共同で履歴書・エントリーシート作成支援を通じた自己分析や企業理解の促進を行い、選考の要となる個人面接に向けた模擬面接を重視して就職支援を行った。また、各学科(コース)担当の就職委員と研究室指導教員との緊密な連携を図りながら、きめ細やかな就職支援を組織的に展開した。

(b) キャリアカウンセラーの常駐相談体制

本学の就職支援での強みであるマンツーマンでの個別相談・指導による高い就職保障をさらに充実させていくため、キャリアカウンセラーの常駐体制を引き続き強化・継続した。

個々学生の履歴書・エントリーシート相談や模擬面接をはじめとした相談支援体制は、主に相談対応として2名で月18日、模擬面接指導対応として1名で月16日を基本に、相談集中時期の追加出勤も要請し、就職・キャリア担当職員、学科・(コース)担当者との連携のもと強力な就職支援を行った。結果、就職キャリアサポートセンターの利用は、前年に引き続き高く推移した。



※修士就職希望者数は、15年度 16名/14年度 30名

■キャリアサポートセンターのべ利用数(学部) 15年度 1,819件/14年度 1,745件

■模擬面接のべ実施件数(学部) 15年度 589件/14年度 379件

(c) スタッフ機能の強化

学生の多様なニーズに即応した就職支援を行うため、就職・キャリア担当職員のスタッフ機能を強化する目的で、職員1名をCDA(キャリア・ディベロップメント・アドバイザー)資格取得講座に派遣した。15年度はこれまで資格取得講座を受講した職員のうち2名がCDA資格を取得した。

また、新任職員については、業務時間内で研修としてキャリア教育ユニットの学部生講義や3年生就活支援講座への参加を保障した。

(2) 学生ニーズの多様化に応じた就職支援

①学部生・大学院生共通の就職支援

(a) 「就活支援講座」の実施

学部3年次生および修士1年次生を対象に、前期は各企業個別の公募制インターンシップ実習に備えた支援講座を設置、後期からは従来の15週連続での「就活支援講座」を開講、最終講座では「マナー総仕上げ」による面接対策の強化を図った。また、別途に個別演習中心のサブ講座を設置し、就職活動準備を細やかに支援した。講座内容については後掲。

(b) 企業説明会、業界講演会

学部4年次生および修士2年次生対象の学内企業説明会は、4月以降3月までの期間で延べ78社を招致・案内うち30社の開催が出来、120名(延べ人数。実人数は70名)の学生が参加し、うち実人数16名が内定を獲得した。また、学部3年次生および修士1年次生を対象に実施した学内<業界講演会>では昨年度と同数の16社を招致・開催し、参加学生は昨年度を上回る390名(延べ人数。実人数は120名)で開催ができた。学内<合同業界研究会>は昨年度に引き続き採用実績のある46社を招聘し、2月後半2日間で開催した。学生285名(延べ数。実人数は179名)が参加し、企業研究と合わせて就職活動スタート直前での意識の高揚が図れた。

(c) 合同説明会バスツアー&合同説明会現地指導

合同説明会は、採用意欲ある企業との積極的接触の場であり、学生の応募機会を創出する目的で、学内就職掲示板やWEB掲示板への一覧表掲出や志向地域に於ける個別案内などを通じて学生に参加の奨励を行った。また、県内開催説明会においては現地指導を行い激励した。参加学生は合同企業説明会参加を機に就職活動が促進され、

以降の内定獲得の重要な契機となった。

3 年次生及び修士 1 年次生対象の「合同説明会バスツアー」は、学内企業研究会と連続して就職活動開始時に大規模な大阪会場のみで実施し、早期からの活動促進を図った。

(d) その他特別講座・セミナーの実施

例年、外部講師も招き開催している未内定者を対象とした特別講座・セミナーについては、今年度は企業の求人活動が長期化し、10 月以降・年度末まで合同企業説明会や本学への直接求人が継続したため、就職・キャリア担当職員による個別相談での指導や求人企業斡旋を中心に行い、早期の内定獲得を図った。

(e) 就活サポーターによる下級生支援

学部 4 年生で既に内定を獲得した学生に依頼し、就活サポーターとして 12 名から協力を得た。後期就活支援講座のなかで 2 回 (11/17・24) にわたり「内定者の先輩の話を聞く会」を開催して下級生に対するアドバイスをを行った。また、2 月の学内合同業界研究会では、運営の補助とともに、参加学生へのアドバイスなどで協力を得た。

(f) 就職・キャリアサポートセンターの利用促進

サポートセンターの利用方法について、スタディガイドでの掲載を整備し、就活支援講座での就職ガイダンスにおいて詳細に案内した。

②学部生の就職活動支援

学部生に向けて、以下の支援講座を開催した。

【学部生向け就活支援講座】 ※は院生と共通講座			
日時	対象	テーマ	内容・ねらい
2015/4/13(月)	※	就職ガイダンス	就職課からのガイダンス。就職状況、採用スケジュール、必要な準備、インターンシップ、後期の支援内容、夏休みに取り組んでほしい課題など。
2015/6/23(火)	※	公務員ガイダンス	本学の公務員実態、公務員試験対策講座案内、公務員の仕事紹介、公務員試験の概要と準備。
2015/7/7(火)	※	自己分析・応募書類(ES、履歴書)の書き方	自己分析を行い、夏季・秋季インターンシップ(自由応募型、採用直結型)の応募書類を書くために必要な、文章に盛り込む必要要素、伝わりやすい文章構造などについて解説。
2015/7/14(火)	※	ビジネスマナー講座	インターンシップに参加するにあたって必要なマナー(メール、電話、送付状やお礼状など)。第一印象、身だしなみ、クールビズ
2015/10/6(火)	学部	就職ガイダンス	2017就活スタートにあたって、本学の就職支援メニューと支援スケジュールについて
2015/10/13(火)	学部	ビジネスマナー講座(1)(2)	社会人になるには、なぜマナーが必要か、就活の場面での様々なマナーについて(説明会、メール、電話、送付状やお礼状など)。第一印象、身だしなみ、ビジネススタイルチェック
2015/10/20(火)	学部	自己分析	自己分析の必要性、自分の特徴を見つける
2015/10/21(火)	学部	業界・企業研究(1)	各業界についての解説
2015/11/10(火)	学部	業界・企業研究(2)	業界・企業分析の仕方や情報の集め方について 就活ノートの作り方、ノートの具体例など
2015/11/17(火)	学部	職種・仕事研究(1)	品質管理・分析職・SEの仕事内容、求められる視点などについて
2015/11/24(火)	学部	ES・履歴書の書き方	自己PRや志望動機など。文章に盛り込む必要要素、伝わりやすい文章構造、文章表現のコツなど。
2015/12/1(火)	学部	職種・仕事研究(2)	製造生産・研究補助・営業職・事務職の仕事内容、求められる視点などについて
2015/12/8(火)	※	筆記試験対策(ガイダンス)	筆記試験の種類とその対策について
2015/12/15(火)	学部	面接対策講座	面接対策(個人面接・集団面接)と準備
2015/12/15(火)	学部	職務適性テスト(実施)	実施日。
2015/12/22(火)	※	SPI模試	SPI試験の受験対策
2016/1/12(火)	学部	職務適性テスト(解説)	解説日。
2016/1/19(火)	※	筆記試験実戦対策講座	SPIを中心とした筆記試験実戦対策講座
2016/1/26(火)	学部	グループディスカッション対策	グループディスカッションの考え方と想定される企業への貢献の仕方等。
2016/1/29(金)	学部	就職ガイダンス	今後の就職支援メニューとリポートセンターの利用について、学内企業説明会への参加の仕方等。証明書の発行、健康診断の日程、複数内定の場合の対応、就職試験による退社申請について等
	学部	マナー総仕上げ講座	※スツ着用 声を出す挨拶 魅力的な話し方演習(話す口調、惹きつける話し方、話すメリハリ) 最終スタイルチェック(身だしなみ) 合説、個別の説明会における振る舞い方や質問の仕方、面接時のマナー。
【就活支援サブ講座】			
日時		テーマ	内容・ねらい
2015/11/17(火)	※	先輩の話を聞く会(第1弾)	4年生の内定者より就職活動の体験談を話してもらう。 1回につき6名。1人5分程度。終了後、一旦解散し、質疑応答の時間を30分設ける(15:40～16:10)。
2015/11/24(火)		先輩の話を聞く会(第2弾)	
2015/12/9(水)	※	ES・履歴書作成演習	自己PR 学生時代に最も打ち込んだこと
2015/12/22(火)	※	ES・履歴書作成演習	
2016/1/26(火)	※	ES・履歴書作成演習(追加分)	
2016/1/1(木) 2016/1/8(金) 2016/1/21(木) 2016/1/22(金)	学部	SE仕事体験講座(コンピュータ学科対象)	IT企業への応募に向けて理解を深めるための講座 (システムエンジニアの仕事理解と動機づけ)
2016/2/10(水)	学科	模擬面接(コンピュータ学科の内、11希望)	11希望者の内、希望者のみ参加。2時間程度。
2016/2/19(金)	学科	模擬面接(コンピュータ学科の内、11希望)	合同業界研究会と同日に。参加希望者が多かったため、時間を分けて実施。

③大学院生の就職活動支援

大学院生は研究職、技術職への志向が強く、また企業側の期待、求められるものが自ずと高くなるため、それに応じた支援が必要となる。引き続き院生向けの支援を強化した。

【院生向け就活支援講座】 ※は学部生と共通講座			
日時	対象	テーマ	内容・ねらい
2015/4/13(月)	※	就職ガイダンス	就職課からのガイダンス。就職状況、採用スケジュール、必要な準備、インターンシップ、後期の支援内容、夏休みに取り組んでほしい課題など。
2015/6/23(火)	※	公務員ガイダンス	本学の公務員実績、公務員試験対策講座案内、公務員の仕事紹介、公務員試験の概要と準備。
2015/7/7(火)	※	自己分析・応募書類(ES、履歴書)の書き方	自己分析を行い、夏季・秋季インターンシップ(自由応募型、採用直結型)の応募書類を書くために必要な、文章に盛り込む必要要素、伝わりやすい文章構成などについて解説。
2015/7/14(火)	※	ビジネスマナー講座	インターンシップに参加するにあたって必要なマナー(メール、電話、送付状やお礼状など)。第一印象、身だしなみ、クールビズ
2015/10/6(火)	院生	就職ガイダンス	就職活動のスケジュール確認。支援メニュー。
2015/10/13(火)	院生	職種研究	研究・開発、品質管理、製造・技術、営業、CRAについて求められる資質や働きを理解する。
2015/10/20(火)	院生	業界研究	業界については医薬・食品・化学を中心にトレンドを知ること。
2015/11/10(火)	院生	企業研究	過去2回の講座での予備知識を元に、実際の企業例を使いながら企業研究の仕方を学ぶ。就職活動での企業研究はどのようにするのか、企業HP、有価証券報告書、マイナビetcを活用し、自分で企業研究できるようになる。
2015/11/17(火)	院生	ビジネスマナー1・2	社会人になるには、なぜマナーが必要か。就活の場面での様々なマナーについて(説明会、メール、電話、送付状、やお礼状など)。第一印象、みだしなみ、ビジネススタイルチェック。※スーツ着用
2015/12/1(火)	院生	自己分析演習	自己分析の仕方を学ぶ。自分の強みと特徴を見つけられるようになる。「学生時代に頑張ったこと」「私の特徴(強み)」を実際に書けるように自己分析と他己分析を行う。
2015/12/8(火)	※	筆記試験対策(ガイダンス)	筆記試験の種類とその対策について
2015/12/8(火)	院生	ES・履歴書演習1 Aグループ(12/1にグループ分け)	12/1の自己分析を元に、ES・履歴書は人事が何を知りたくて書かせているのかを理解し、何をどのように書くべきかを学ぶ。大学の履歴書にもある「学生時代に頑張ったこと」「私の特徴(強み)」のどちらかを400字で書けるように学ぶ。
2015/12/15(火)	院生	ES・履歴書演習1 Bグループ(12/1にグループ分け)	12/1の自己分析を元に、ES・履歴書は人事が何を知りたくて書かせているのかを理解し、何をどのように書くべきかを学ぶ。大学の履歴書にもある「学生時代に頑張ったこと」「私の特徴(強み)」のどちらかを400字で書けるように学ぶ。
2015/12/22(火)	※	SPI模試	SPI試験の受験対策
2016/1/12(火)	院生	ES・履歴書演習2	志望動機について、企業側の求める視点。相手に伝えるべきないようについて理解できるようになる。
2016/1/19(火)	※	筆記試験実践対策講座	SPIを中心とした筆記試験実践対策講座
2016/2/2(火)	院生	GD・GW演習	GD・GWを企業が行う理由を知る。どのような目線で見られているかを理解した上で、その場での貢献の仕方を考えられるようになる。可能であれば例を実践的に経験(特にGDは)する事で、関わり方と自己の役割を考える。
2016/2/9(火)	院生	面接対策演習	面接対策について、面接の位置づけや想定質問から何を人事は知りたいのかを考える。時間に余裕があれば、実践形式で面接を行ってみる。(無理であれば、模擬面接を推奨していく)
【就活支援サブ講座】			
日時		テーマ	内容・ねらい
2015/11/17(火)	※	先輩の話を聞く会(第1弾)	4年生の内定者より就職活動の体験談を話してもらう。 1回につき6名。1人5分程度。 終了後、一旦解散し、質疑応答の時間を30分設ける(15:40~16:10)。
2015/11/24(火)		先輩の話を聞く会(第2弾)	
2015/12/9(水)	※	ES・履歴書作成演習	自己PR 学生時代に最も打ち込んだこと
2015/12/22(火)	※		
2016/1/26(火)	※	ES・履歴書作成演習(追加分)	

④留学生の就職活動支援

2016年3月卒業の留学生で日本での就職を希望する学部生が2名、2015年9月修了の留学生で日本での就職を希望する大学院生が1名と少数であったので、個別支援を中心とした就職支援を行った。支援内容としては日常の求人情報提供をはじめ、留学生対象の合同企業説明会への参加奨励、外国人雇用サービスセンターへの登録と利用および求人情報の検索についての支援を行った。

進路状況については、就職希望の学部生2名が内定を獲得して日本で就職、就職希望の大学院生1名が日本での就職をせず帰国した。進学を希望する学部生8名は全員日本での大学院進学を果たした（本学大学院が6名、外部大学院が2名）。

(3) 企業との関係強化と求人情報の取得

(a) 求人依頼・PR活動

求人依頼件数は前年並みの約3,500件としたが、年度途中においては、本学に求人履歴のある企業を対象に求人状況調査を年間4回（4・6・8・10月）実施した。学内企業説明会の開催要望も同時に聞き取ることで、具体的な採用機会の提供にもつなげた。また各地の合同説明会での企業との情報交換と本学PRの活動、必要に応じての企業訪問による求人掘り起こしも行った。以上の情報収集によって「応募可能求人情報」を抽出して、学内ホームページでの就職WEB掲示板への掲出、各研究室指導教員へのメール、電話・郵送による個別連絡などを通じて、適宜学生へ情報提供を行うとともに応募奨励した。

(b) 固有のニーズに即応した求人開拓

本学生の就職志向の強い業界の企業に対し、就職・キャリア担当スタッフと指導教員が同行して訪問を行った。また、採用スケジュールの変更となる2016卒生採用に関して、外部団体が主催する大学就職担当者と企業との情報交換会に積極的に参加し、情報収集に取り組んだ。

(c) インターンシップ実習受入企業との関係強化

インターンシップ実習は、学生の就業力育成を図る貴重な学習の機会であるとともに、採用実績企業との関係継続や本学学生が志望する優良企業の開拓を図れる面がある。就職・キャリアでは引き続きインターンシップ実習での受入協力を積極的に行い、前年協力企業・事業所19社について協力を頂け、43名の実習生を送ることができた。15年度受入企業のうち2社で採用実績の継続、新規に1社で採用を得ることができた。

2 公務員試験対策

(a) 公務員対策講座

2016年3月卒業生での公務員試験合格者は延べ4名（前年比同数。内訳：警察官1名、消防官2名、水道企業団1名）であった。2017年卒向けの公務員試験対策講座は、教養試験対策に絞って8月に一般知能対策の4日間（8月19・20・21・22日で20時間）、9月に一般知識対策の4日間（9月25・28・29・30日で17.5時間と模擬試験）で、昨年に引き続き対策分野別に月を変え、分割受講可とした。延べ受講者数9名（2年次生1名を含む）で、前年18名から大きく減少した。民間企業の求人が好調であったことから民間企業への志向の高まりが影響したものと思われる。教養試験対策の夏期の講座からの応用編として一般知能分野の演習講座を2月に計3日間（2月22・23・24日、15時間）開講し、対策強化をはかった。春の講座は昨年まで3月に開講していたが、民間企業との併願者が多いことも考慮し、今年度は2月開催とした。受講生は14名（2年次生1名を含む。前年は17名）であった。

(b) 公務員ガイダンス

6月に公務員に関するガイダンスを開催した。公務員の種類と仕事、採用試験の概要と試験対策のガイダンス、昨年度に引き続き長浜市役所、滋賀県警へ実際の業務や状

況についての講演を依頼した。

(c) 公務員試験資料の整備、強化

過去の試験問題の入手、サポートセンターでの閲覧用資料や問題集の整備、公務員試験日程の速報提供など、提供資料の一層の充実をはかった。

3 保護者（会）との連携

保護者会との連携協力のもと、就職支援にも取り組んだ。具体的には、保護者会総会でのご協力をお願いの他、以下のことに取り組んだ。

(a) 保護者（会）との連携

6月の保護者会において、就職をテーマとする分科会を開催し、本学での就職状況や支援、家庭での就活生との接し方、現在の就職活動の特徴などについて懇談した。

(b) 保護者向け就職パンフレットの作成

新入生の保護者に対し、本学のキャリア形成支援と就職支援に理解と協力を得ることを目的に、入学式後に「本学学生の内定状況と就業力育成支援」を作成・配布(学内で作成)の上説明を行った。

(c) 広報誌「めいこう」で就職支援状況を周知

本学広報誌「めいこう」において、学生の就職状況ならびに本学の就職支援について、必要なメッセージを発信した。特に16年度採用活動スケジュールの大幅な変更による学生たちの就職活動の変化を理解していただき適切な指導を頂けるように情報を発信した。

(d) その他、保護者へのメッセージ発信

10月以降の未内定者で連絡が取れない学生については、保護者に連絡を取らせていただき、求人活動の長期化により内定獲得の機会が多くあることを説明、保護者の協力を得て就職キャリアサポートセンターへの来室・相談・紹介を促していただいた。

4 学外諸団体との緊密な連携

ハローワークとの連携

ハローワークとの連携による就職支援は、4月より通年で、長浜ハローワークから相談員の派遣(隔週火曜午後)を受けて、ハローワークへの登録手続きはじめ、ハローワークでの求人情報の検索や紹介、また既卒生に対する就職支援などの有効な支援を実施した。

【5-1】学生募集

長浜バイオ大学では、アドミッションポリシー（入学者受入れ方針）を定め、多様な入試方式を設定し、理科が好きでバイオサイエンスおよびバイオテクノロジーを学び、社会の役に立ちたいという意欲ある学生を募集した。

1 全体の入試結果

ここ数年の景気低迷に伴う大学卒業者の就職状況の悪化のため、就職を意識した動きから、メディカル系など資格が取得できる学部や、卒業後の進路に直結しているイメージの強い理系学部に人気が高まっていたが、急速に就職状況が回復しており、文系学部への人気回復傾向が生じた。また、昨春より新課程へ移行している理科の出題範囲拡大など負担感が強まったことも少なからず要因のひとつと考えられ、全国的に理系（理・農・生命科学）志望者が減少し、文系人気がより鮮明となり「文高理低」傾向が明確となった2016年度入試であった。

2 本学の入試結果

本学の入試結果は、推薦・一般入試・センター利用・留学生入試等を含めた学部全体で前年比94%であった。龍谷大学農学部の設置も大きく影響しているが、地域や難易度を問

わず全国的に理学・農学・生命科学系が減少しており関西・東海圏以外の他大学とも複雑に絡み合う構造となり、志願者・入学者の流動性が高まり、入学手続者の進学先変更が3月末まで続いた。

- (1) 指定校特別推薦入試は、推薦依頼対象高校を拡大することで新たに推薦いただく高校を増やしたが、入学者数は前年を下回る結果となった。例年複数推薦いただく滋賀県内高校からの推薦者数が減ったことで全体の入学者数は減少となった。また、コンピュータバイオサイエンス学科については、独自のパンフレットを作成し、推薦依頼対象校を全国に広げて募集したが推薦者の増には繋がらなかった。
- (2) AO(実験・実習評価型)入試は、事前対策がし易いテーマであったため過去3ケ年では一番多い志願者数となった。コンピュータバイオサイエンス学科は他の学科と同じテーマで募集したが受験者を出す事は出来なかった。学部全体志願者数は対前年比162%となった。
- (3) 一般公募制推薦入試は、11月に実施していた従来の2方式判定制度とは別で、12月に新たな受験者層の掘り起こしに繋げるため多面的・総合的に評価する、自己推薦型C入試を昨年度から導入した。11月の試験で募集していた専門総合学科特別を廃止し、自己推薦型C入試として12月に実施した。志願者は関西・東海圏以外からも出願があり、志願者数を昨年の3.4倍に増加する事ができた。
- (4) 一般入試前期A・B学部全体の志願者数は前年比100.7%と前年を若干上回ることができたが、大学入試センター試験利用入試志願者は前年比86%であった。これは、大学入試センター試験の平均点が、化学基礎・物理・化学・数学IA・英語で低下し、出願が抑制されたためで、得意科目が活かせるセンター試験併用型(センタープラス1)への出願に移行し、センター試験の得点だけで判定するセンター利用方式が減少した。インターネット出願を11月に実施している推薦入試から新たに導入し、受験生への利便性と割引による検定料の負担を軽減し、推薦入試から出願促進を行った。出願書類受付からはじまる入試業務の作業工程をいくつか軽減でき、システムトラブルもなく無事実施することができた。推薦入試以降の入学試験は、完全インターネット出願となり、志願票や振込用紙など印刷代の削減と願書全体の重量をおさえる事ができ、願書発送代も削減が可能となった。
- (5) 学部全体の入試結果として、志願者総数は前年比94%で女子占有率は28%(昨年32%)であった。入学者の女子占有率は26%(昨年26%)で昨年と同比率であった。学科別ではバイオサイエンス学科が志願者数で、アニマルバイオサイエンス学科は入学者数で女子占有率が高くなっていた。出身都道府県別では岐阜・愛知・三重の3県の合計志願者数は昨年度より増加し、地元滋賀県も104%と伸ばすことができ入学者数も増加した。全体としての合格者数は昨年と同じにも関わらず、学部全体の倍率を大きく下げることなく、学部募集定員を上回る結果となった。
- (6) 大学院入試については、博士前期課程の本学学部生の学内進学者を対象とした入試や一般入試、特別推薦、社会人入試、外国人留学生特別入試を実施し募集定員を上回る結果となった。特に学内生に対し低年次から大学院進学説明会を開催し、進学・研究への学習意欲を高めた。博士後期課程は、学内進学者が順調に研究をすすめ募集定員を上回る結果となった。

(資料①「2016年度入学者統計資料」)

3 募集広報

- (1) 高校生とその保護者、高校教員を対象とした広報活動として、高校生の多くが利用しているLINEを3月から活用し、高校教員、保護者へのリアルタイムな情報発信として本学ホームページとFacebookを充実させ、勉学や自主活動など顕著な活躍をした学生の出身高校にその姿を報告する「カイツブリ通信」を発送しました。下半期は、地域での閲覧率が高い地域情報紙への広告掲載を行いました。近畿圏、全国での本学知

名度アップのため、9月から全国紙と地方紙、雑誌記者などにプレスリリースをダイレクトに送信する代行サービスに参加いたしました。資料請求者数は2014年度から2015年度にかけて対前年比103%と増加した。男女とも増加し、学年別では高校1年生で大きく増えており、6・7・8月、2月で資料請求が増加してし、高校3年生では7月をピークに8・6・12月が多く、2月は、インターネット出願の願書請求への抑制に繋がっていると考えられる。

- (2) 夏のオープンキャンパスは参加者の満足度は両日で80%となっており、指定校推薦、AO入試を控えた時期ということもあり地元滋賀県3年生の参加者が多く、同日開催とした「サマーバイオ塾」にも多くの高校生・教員が参加した。10月開催のオープンキャンパスは、本学学園祭と同じ日に開催し昨年度から導入した一般公募制推薦入試（自己推薦型）Cの対策として有名予備校の講師を迎え、小論文対策講座を開催し好評を得た。
- (3) 高校ガイダンスは高校生にバイオサイエンス・バイオテクノロジーと、その分野の持っている可能性や魅力、本学の学科特徴やプログラム、就職・進学、学生生活、入試方式などを直接PRできる機会であり、受験者・入学者実績を優先し積極的に参加した。本学通学圏内の高等学校からの依頼については実績が無くとも参加した。今年度の実施回数は92校（昨年度73校）で参加人数は582名（昨年度520名）と1校当たりの受講者数は6.3人（昨年度7.1人）となり、バイオ生命科学分野、本学の魅力と認知度を高める事ができた。留学生対象の実施回数は9校（昨年度9校）で参加人数は37名（昨年度50名）と減少した。地域貢献や本学の魅力・認知度向上を目的に地域団体や高等学校からの来学型による大学説明・施設見学にも対応した。
 - ・大阪府立北かわち阜が丘高等学校2年生理系・大学見学・ミニ講演（河内浩行准教授）（6/19・12名+教員2名）
 - ・愛知県立犬山高等学校保護者・大学見学（6/30・20名+教員4名）
 - ・滋賀県学校給食会・大学研究室見学（河合靖教授）・講演（星野科学）（7/17・15名）
 - ・岐阜県立岐阜農林高等学校育友会・大学見学（宇佐美昭二教授・齋藤修教授・蔡晃植教授）（8/6・20名+教員2名）
 - ・兵庫県立明石西高等学校1年生・大学見学（9/25・33名+教員1名）
 - ・長浜観光ボランティアガイド協会会長浜再発見研修・大学見学（9/30・15名）
 - ・彦根市立稲枝北小学校5年生・大学見学（上原啓史・市村薫）（10/8・14名+教員2名）
 - ・滋賀県生活学校運動推進協議会・大学見学・ミニ講演（池内俊貴准教授）（10/9・40名）
 - ・長浜観光ボランティアガイド協会会長浜再発見研修・大学見学（10/14・15名）
 - ・滋賀県立草津高等学校1年生・大学見学（10/21・16名+教員1名）
 - ・彦根ボランティアガイド協会・大学見学（12/9・12名）
 - ・長浜市立長浜公民館 土曜学び座・大学見学・科学実験の体験（12/19・60名+保護者20名）
- (4) 高校訪問は大学案内の完成後6月～7月にかけて365校、願書が完成する9月から11月に336校とアドミッションセンターを中心に職員の協力を得て、年間のべ701校（昨年度のべ611校）を訪問した。本学在籍生の学修状況の報告と、入試情報の提供と受験生の志望動向等の情報収集を行った。8月には学生担当が中心となり京都大阪の日本語学校へ在籍生の報告のため訪問した。
- (5) 本学主催の高校教員対象大学説明会は、学部説明や入試結果と変更点就職・進学状況と就業力育成支援での学生発表、学部の説明と2015年度4月からスタートした「臨床検査学PG」の説明を加え、本学の教育PGの理解を深めていただくために開催し、高等学校13校13名の教員と塾からの参加者を含め14名の参加があった。

【5-2】高大連携推進事業活動

1 事業の全体結果

2015 年度の高大連携事業の全受講者は、入試担当から依頼を受けたガイダンス参加者を含め、延べ 3,511 名の児童・生徒・教員となった。2016 年度入試募集において、高大連携事業を実施した高等学校から 2014 年度と同じく 60 名の入学者の獲得に貢献できた。

2 各事業の内容及び結果

- (1) 「長浜学びの実験室」事業を除く小中高生対象の教育連携事業については、実施校を精査しつつ、京阪神及び東海地区を中心として高大連携事業を展開した結果、出張型連携講座は 29 回（17 校・延べ 1,228 名が受講）、来学型連携講座は 31 回（8 校と教員研修 1 回・延べ 1,149 名が受講）であり、昨年度と同じく岐阜・愛知地区にて積極的に事業を展開し、この地区での受験者増に貢献することができた。

また、課題研究支援として、昨年度と同じく、岐阜県立岐山高等学校生物部、岐阜県立岐阜農林高等学校に対して研究支援を行うことが出来た。

華頂女子中学高等学校での「総合華頂探求」については、前年度の講座と同様に行うことができ、初めて受験生の獲得につながった。

京都 CAMPUS 河原町学舎を活用した高大連携事業については、既存の実験施設を利用した講座を実施しており、2015 年度は京都府教育委員会「府立高校活性化事業」に採択された京都府立北嵯峨高等学校との連携講座（2 日間）を実施することができた。

8 月に実施した第 39 回全国高等学校総合文化祭「びわこ総文」では、自然科学部門の審査員として本学教員が協力できるように調整するとともに、全国の高等学校生徒や教員へ本学を知る機会を提供することができた。

- (2) 協定校との連携事業については、滋賀県立虎姫高等学校とは従来から実施してきた高大連携講座「ウィンターセミナー」のほか、学校設定科目「究理Ⅰ」にも協力し、さらに幅を広げることができた。また、岐阜県立岐阜農林高等学校とは、生物工学科の 1・3 年生及び動物科学科の全学年で実施し、高校との連携関係をさらに発展させた。滋賀県私立近江兄弟社高等学校とは、高校 1 年生を対象とした模擬講義や学長講演などを通して、生徒の興味関心を伸ばす講座の実施に取り組んだ。

- (3) 教員対象研修事業として、全国農場協会より依頼を受けた農業高等学校教諭を対象とする「農業実験実習講習会」を本学にて実施し、全国から 12 名の農業高校の教員を対象として「植物バイオテクノロジー」に係る講座を実施し、本学の魅力を伝えることができた。

また、独自事業としてオープンキャンパスに合わせて開催した「サマー☆バイオ塾」では、高校生だけでなく理科担当教諭も対象として募集を行った結果、延べ 22 名の教諭が参加され、講座の受講だけでなく、大学見学を通して、教学内容を知る機会を提供できた。

教育委員かとの連携事業として、京都府教育委員会「子供の知的好奇心をくすぐる体験事業」に積極的に協力し、京都府内の小中高等学校・5 校の約 300 人へ理科や生命科学の魅力を伝えることができた。

- (4) 業者主催の高校出張型模擬講義及び高校内ガイダンスについては、入試担当と連携して学部学科説明会及び職業理解講座等の高校内ガイダンスにも積極的に参加し、その結果、模擬講義は 37 回（551 名が受講）、高校内ガイダンスは 55 回（583 名が受講）と、前年度（62 回・857 名）より多くの実施に協力することができた。

- (5) 外部資金への応募と実施では、本学として応募することはできなかったものの、国立研究開発法人 科学技術振興機構「中高生の科学研究実践活動推進プログラムサイエンスキャンプ」へ応募された京都光華高等学校の応募書類の支援を行うことができただけでなく、採択へ導くことができ、2017 年度までの 3 年間で「再生可能エネルギー」

に係る高校生徒の研究を支援することとなった。

- (6) 2014年度から長浜バイオインキュベーションセンター・9号室を利用した高大連携実験・実習プログラムの開発を行い、「メダカの性別鑑定」の講座を完成することができた。

3 高大連携事業に関する連携協定締結の推進

今年度は、教育連携事業は拡がり、事業内容も深まってきてはいるが、本学と高等学校との継続的に連携事業をすすめるための連携協定の締結には至らなかった。

【6-1】学習・就業力支援活動

1 学習支援の取組み

本学の専門教育に必要な基礎学力を涵養するために、学習支援センターでは化学、生物担当の専任教員2名と英語、数学、物理担当の非常勤教員4名を配置して学習支援を行っている。今年度から企画運営のスーパーバイザーとして一般教育科目担当の専任教員4名が学習・就業力支援委員会に加わり、一般教育科目と学習支援の連携を強化した。また、本学学生の学習意識や状況を網羅的・継続的にとらえて学習支援に活かすためにアンケート調査を実施している。以下に、具体的な取り組みについて述べる。

(1) 対面指導による学習支援

学生からの基礎科目（化学、生物、数学、物理、英語）の質問や相談について、学習支援スタッフが個別に対応した。今年度は新たな取り組みとして、①一部基礎科目における成績下位の希望する学生に対する面談および個別指導などの学習支援センターの介入、②開室時間の延長、③スタッフとの交流イベントを行った。これらの取組みの結果、介入した学生の学習理解度の向上が成績の統計比較からも認められた。また、学習支援センターの利用者数の増加にも寄与した。2015年度の利用件数は前年度の1.7倍の1,913件であった。実人数は364名で1年次生の53%、2年次生の44%が学習支援センターを利用したことになる。学生の質問内容は集約してデータベース化し、授業改善に役立てるため、関連科目の担当教員に随時フィードバックしている。

(2) 基礎学力の強化のための取組み

化学を履修していない学生や苦手な学生を対象に基礎力アップ講座「化学」を実施し、のべ182名が参加した。ゲームの要素などを取り入れて楽しくわかりやすい内容に工夫したことで、受講した学生からとても役に立ったと好評であった。また、学生が自分の学び方や考え方を認識し、新たな学びの経験することで学習姿勢の幅を広げ、コミュニケーション能力などを向上させることを目的として「学びのセミナー」を開講した。参加学生はのべ41名だったが、反応はきわめて良好だった。受講者の少なさは後期開講が一因と考えられたことから、次年度は1年次前期に実施して受講生の増加を図る。学習支援のために実施した講座を以下に挙げる。一般教育科目担当の専任教員との連携とアクティブラーニング化により、全体として内容の充実を図った。

- ・「化学基礎」個別サポート講座
- ・基礎力アップ講座 「化学」 前期6回
- ・基礎力アップ講座 「有機化学×遊ぶ×学ぶ」 後期4回
- ・学びのセミナー 後期9回
- ・数学履修ガイダンス 前期1回
- ・数学「よくある質問に答える会」 前期、後期各1回

(3) 「学びのサイクル（PDCAサイクル）」を身につけるための支援と指導

1年次生にむけて、入学式後のガイダンスで、学生が成長するために目標設定・計画、ふり回りの重要性と具体的な目標設定とふりかえりの仕方について説明した。2年次生、3年次生にむけても期初のガイダンスでバイオ学習ワンダーランドのポートフォ

リオ機能を活用し、目標設定とふりかえりを促した。

(4) 学習・就業力支援センターアンケート

学生の学習に対する意識や行動を把握することを目的として 1 年次生から 3 年次生を対象に、入学時、前期末、後期末にアンケート調査を実施した。調査項目は、学生の学習状況と学習・就業力支援センター、バイオ学習ワンダーランドの利用状況についてである。学生の学習経験や学習活動の経時変化や関連性を分析し、学習・就業力支援センターの活動に活用した。調査結果の概要は学内 HP に公表している。

2 バイオ学習ワンダーランド（以下、WL と略す）の運用

WL の円滑な運用のために、新入生に対して初期登録、利用方法の説明、出席登録のサポートを行った。また、教員の依頼に応じて WL への問題登録や小テスト実施のサポートを行った。教員の利用をより促進するために F D 研修会で講義資料の公開、小テストなどの機能の利用例や WL の便利な機能を紹介した。

WL は 2015 年度で運用開始から丸 5 年が経過した。本学の e-ラーニングシステムの今後の在り方を検討するための参考として、現在の WL 利用状況と各機能の使いやすさなどの機能の評価をまとめ学習・就業力支援委員会に報告した。以下に、その要点について述べる。

(1) 出席登録の支援

全学年において WL を利用した出席登録を行った。週間ポートフォリオの学生時間割に各自の出席状況を表示することで学生の自覚を促すとともに、教職員が個々の学生の出席状況全体を容易に把握でき、就学困難な学生の早期発見につながった。

(2) コンテンツの充実

自習用教材の「大学生物」（基礎生物学）や実験動物技術者試験対策問題集を新規登録した。教員が講義資料、課題資料、動画資料などの教材を WL に登録する講義や確認テストを利用する講義が増加している。一方、支援センターアンケート結果から学生が WL 機能のなかで講義資料の閲覧をよく利用していることがわかった。

(3) ポートフォリオ（以下、PF と略す）の指導と支援

学生が WL の PF を利用しふりかえりを行うことによって「学びのサイクル」を身につけ、主体的に学ぶ力を身につけるための指導と支援を行った。入学時ガイダンス・期初・期末に WL の PF に記入を呼びかけ、記入内容を 1 週間ごとに確認し、気になる学生には声かけを行った。週間 PF の記入者のべ数は前期 269 名、後期 176 名であった。また、期末に実施した支援センターアンケートの「学び」に関する部分の個人へのフィードバックを行い、学生が学習状況の変化を把握できるようにした。後期は、学生の読書習慣のきっかけづくりと週間 PF による行動記録の習慣を促すためのイベントとして「読貯大会」を実施した。32 名が参加を申込み、10 月から 3 月の期間、週間 PF に書評などを記入した。

3 入学前教育講座の実施

A0 入試、指定校推薦入試、公募制推薦入試の早期入学決定者を対象に、大学での授業を受けるために必要な基礎学力の涵養、学習の継続のため入学前教育講座を実施した。12 月から 3 月の 4 日間に英語、数学、化学、生物の講義を行い、65 名が参加した。早期入学者に対しては自習用の教材と課題を与え、入学前教育用 WL を活用して、入学までの期間の継続的な学習を促した。また、大学入学にあたっての様々な不安を解消し、円滑に大学生活のスタートが切れるように昨年度から開始した研究室訪問や大学での学び方の講座、在学生との交流は内容を精査して継続した。アンケート調査結果によると、昨年と比較して楽しかった、学べた感覚があるとの評価が得られた。

4 キャリア科目の企画・運営

本学におけるキャリア教育は「柔軟力」「自律力」「論理的思考力」の育成を目標として、「学生の主体的な学びを確立する教育システムの構築」に取り組んできた。2015年度は滋京奈地域産学協働連携協議会における成果をふまえ、授業の充実と改善を図った。演習科目やPBLは長浜商工会議所をはじめとする地域社会との連携のもとに実施した。

1年次「社風発見インターシップ」は、滋京奈地域11大学と連携して今年度から開講し、「社風」をキーワードにした企業研究と就業体験に27名が参加した。2年次「長浜魅力づくりプロジェクト」は、32名の学生が長浜市中心市街地の商店街と連携してにぎわいを創り出すイベント「地の酒フェスタ+脱出ゲーム in 長浜」を1月16日、17日に開催した。この事業は平成27年度滋賀県にぎわいのまちづくり総合支援事業に採択された。

3月に外部評価委員会を開催し、2015年度キャリア教育事業の取組と来年度に向けた課題について評価を受け、2016年度に向けた課題と改善策を検討した。また、基礎力判定テストPROGを実施し、リテラシー（問題解決力）とコンピテンシー（行動特性）を客観的指標により評価した。測定結果は解説会を実施し学生にフィードバックするとともに、授業改善の方向性を探るきっかけとなるよう教職員を対象に分析結果の報告会を開催した。

5 産業界のニーズに対応した教育改善・充実体制整備事業

(1) 【テーマA】滋京奈地区を中心とした地域社会の発展を担う人材育成

文部科学省の事業助成期間が終了したが、「滋京奈地域産学協働連携協議会」を存続させ、継続的に事業を実施した。本学はPBL部会のリーダー校として7大学と連携し、PBLの改善成果の共有とさらなる発展にむけた取組を推進した。

(2) 【テーマB】インターンシップ等の取組拡大

滋京奈地域インターンシップ推進協議会のもとインターンシップの拡充を図り、社風発見インターンシップを実施した。本学はこの事業を1年次配当の春期集中科目「社風発見インターンシップ」として新規に開講した。また、インターンシップの担い手を養成するため、協議会で研修会を開催したほか、日本学生支援機構等の研修会に職員を派遣した。

6 就業力育成を目的とした学生活動支援

教員や関連部署と連携して、就業力育成につながる学生の自主活動を支援した。2015年度には以下のような活動を支援し、学生の就業力育成に寄与した。

- ・「長浜人の地の酒プロジェクト」 地元の米農家と連携し、酒米づくりを学びながら田植え、稲刈りイベントを企画・実施した。
- ・自主活動団体「Entrance to Science」 身近な科学を地域の方々にわかりやすく楽しく伝える活動が昨年に引き続き、環びわ湖大学・地域コンソーシアムの「大学地域連携課題解決支援事業 2015」に採択された。市民を対象にした町家キャンパスでの定期的な講義活動や小学生を対象にした科学実験教室「子ども長浜学」、長浜南中学校の「親子フォーラム」での科学実験ワークショップなど地域交流を深めるために積極的に活動した。
- ・「iGEM Nagahama」 バラの香りで食品を保存する「FLAVORATOR（香蔵庫）」を遺伝子組換え技術を用いて開発、学生9人が米国ボストンで開催された合成生物学の世界大会「iGEM 2015 Giant Jamboree」に参加して、金メダルを獲得した。
- ・その他、「滋賀県ものづくりフェスタ」、「しごとチャレンジフェスタ」など地域からの要請にこたえる小学生向けイベントなど、年間を通して学生が展開した様々な活動を支援した。

【6-2】長浜市内拠点活動

長浜市中心市街地の「町家キャンパス」は、学生が地域との連携を目指す自主活動「町家プロジェクト」など様々な活動の拠点となっている。2015年度は、5月に町家キャンパスで長浜市主催の「座ぶとん会議」が開催され、学生と長浜市長が懇談した。長浜市長をはじめ長浜市から8人と町家プロジェクト、Entrance to Science、iGEM Nagahama、命洗祭実行委員会など学生6団体20名、教職員4名が参加した。学生がそれぞれの活動を報告した後、意見交換を行った。今年度は、Entrance to Scienceの科学講義のほかにも町家キャンパスでの自主活動に拡がりが見られた。町家プロジェクトが企画した七夕イベント、クリスマスリースづくり、12月に科学に関する活動を行っている学生団体が開催した市民向けのカフェ付きイベント「サイエンスカフェ」など、多くの市民の方や観光客が参加してにぎわった。サイエンスカフェは、iGEM Nagahama、CELL部、紅茶園芸サークルの3団体が共同で開催した。

また、「町家キャンパス」は、本学のキャリア教育の拠点ともなっており、「共生社会の形成と私たちの役割」「長浜魅力づくりプロジェクト」など地域の団体や企業と連携して行うPBL型科目の授業は、町家キャンパスで開講している。「長浜魅力づくりプロジェクト」で今年度実施した「地の酒フェスタ+脱出ゲーム」イベントでは、地域の方々にご協力いただきながら学生が課題に取り組んだ。

長浜市内拠点での活動は、他大学からも注目されている。3月に開催された大学コンソーシアム京都主催FDフォーラムの分科会「学外特設キャンパスでの学び～地域連携と教育効果～」での事例発表の依頼を受け、教員と学生4人が参加し、町家キャンパスでの取り組みを紹介した。

【7】教育・学術情報センター活動

【図書部門】

1 資料の整備

(1) 学術雑誌

2015年の外国雑誌（オンラインジャーナル）は、2014年度に行った全教員対象とした購読希望調査アンケートにより決定したジャーナルとコレクションを購入し、希望の少なかった6誌を削減する一方、新規に2誌、中断していた1誌を購読再開した。2016年の契約については、価格の上昇、為替変動（円安）などにより、2015年購読タイトルのすべてを維持することが予算的に困難となり、教育・学術情報センター委員会で見直しの必要性が話し合われ、再度、全教員対象に購読希望アンケートを行うこととなった。結果、コアジャーナルをはじめ、多くのジャーナルを導入できるコレクションの購読を大学図書館コンソーシアム連合（JUSTICE）での条件により維持し、希望の多いジャーナルに絞って契約することができた。

国内雑誌については、臨床検査学プログラム担当教員推薦の雑誌3誌を追加した。2016年購読の購入雑誌については、委員会で再検討することになり、全教員対象アンケートと合わせて、学生も含めた利用者アンケートを実施した。継続購読の希望の少なかった雑誌4誌と週刊の英字新聞1紙の購入を停止し、新たに2誌と日刊の英字新聞1紙の購読を決め、全面的な見直しとなった。

その他、学内教員が購読し、読み終えた学会誌やそのほかの雑誌についての寄贈を受け付け、最新号ではないが、図書室での閲覧用に供している。

(2) 図書資料

講義使用のテキスト、シラバスに掲載されている資料を中心とした担当教員指定の最重要図書を通年展示し、参考資料については貸し出し可能な資料も準備した。学内教員、研究者の著作本、院生の博士論文を、利用の多いテキストのコーナーの向かいに一箇所にまとめて配架した。英語多読資料はシリーズを増やし、ノンフィクションや

物語など、好みに合わせて選ぶことができるよう、充実させた。英語学習については、多読図書以外にも英語担当教員の協力により、TOEIC、TOEFL 関連や、日本の歴史を英語で解説した本、トピックごとに概観を読むシリーズ、理科学コースブック、科学テキストのシリーズなど英語学習者用教材なども増やしていった。TOEIC、TOEFL の問題集などや英語の講義に関する資料の貸出冊数は近年多くなっている。展示では、季節ごとや月毎に展示内容を変え、図書室内の資料の紹介を行っている。また学内教員からの寄贈本や推薦本を展示した。就職・キャリアサポートセンターからの寄贈本は就活関連本と合わせて紹介した。2015 年度は学習就業力支援センター企画の読書イベント「読貯大会」の協力事業として、図書室では「読貯大会」で紹介された本を入手可能な限りすべて揃えた。学生リクエストの本と合わせて学生の観点から選ばれた本として、紹介記事とともに特別展示を行った。

(3) 視聴覚資料

2015 年度は教員から要望のあった講義教材用の資料の購入が中心となった。そのほか学生からリクエストがあった海外ドラマシリーズの継続などを追加した。図書室で購入する DVD は、できる限り著作権処理済みの資料を購入するようにし、図書室内視聴、講義内での利用のほか、館外貸出も実施している。

(4) データベース

オンライン上で検索できる正確な情報として、国内情報では国立情報学研究所の「CiNii」、海外情報では化学情報協会の「SciFinder」を契約している。それぞれ利用は増加傾向である。毎年実施している SciFinder 講習会では、受講者数の減少もあり、2015 年度は始めて実習形式の講習会を開催した。受講者数減少の歯止めにはならなかったが、ID 取得方法から実際に経験することができ、未利用者だった参加学生にもわかりやすかったと好評であった。

2 環境の整備

(1) 開館時間の延長

夜間 2 時間延長を 2015 年度も実施した。夜間の監視アルバイトには iGEM メンバーの雇用を継続した。2013 年度より試行している定期試験学習のための朝 1 時間早めの 8 時 15 分開室は、2015 年度も引き続き行った。試験期間前 1 週間については、利用者数が 0 のこともあったが、期間中は一定数の利用者があった。

(2) 機関リポジトリの開設

JAIR0 Cloud (共用リポジトリサービス) を利用した機関リポジトリ「長浜バイオ大学リポジトリ」を 2014 年度に開設した。現在、2013 年と 2014 年 (平成 25~26 年) 度博士課程後期課程修了生の学位論文計 8 件を公表している。

(3) 学習用パソコンの設置

自習用デスクトップパソコンは現在図書室内に 24 台あり、一定して利用がある。また、図書室内で利用できるノートパソコンを 2014 年度に導入したが、2015 年度からは図書室外での持ち出しての利用にも対応した。貸出期限は最大 1 週間としている。申請すれば更新も可能とし、週末の学習やクラブ活動などにも利用されている。

(4) 高速充電ステーションの設置

携帯端末高速充電ステーションは、充電による学内パソコン占有防止の解決策として、2014 年度に 4 台、充電用ボックスも簡易な造りでサービスを開始した。利用頻度が高く、ボックスの破損や混雑が著しくなってきたため、4 台を増設し、2015 年度は充電用のボックスを木製の頑丈なものに改良した。

3 他大学図書館との連携

私立大学図書館協会に加盟しており、西地区部会京都地区協議会の活動に参加している。

2014 年度から 2 年任期の地区協議会の研究会検討委員会校を引き受け、2015 年度の第二回研究会を担当した。京都府立植物園を会場に、講演会と見学会を開催した。

県内機関との連携では滋賀県大学図書館連絡会に参加しており、2015 年度は夏季に滋賀大学、冬季に滋賀文教短期大学で、共通閲覧の利用状況や業務での問題、活動報告などの情報を交換した。

電子ジャーナルの契約に関して、大学図書館コンソーシアム連合 (JUSTICE) に加盟し、会員館限定の提案条件で契約をしている。また購読ジャーナルタイトルを厳選していくうえで、契約雑誌以外からの論文入手方法として、図書室では、オンラインを使った他大学研究機関図書館との相互貸借サービスや図書室での検索による公開論文などを提供することにより、学内研究者からの文献等取寄せ依頼に迅速に対応できるよう努めている。

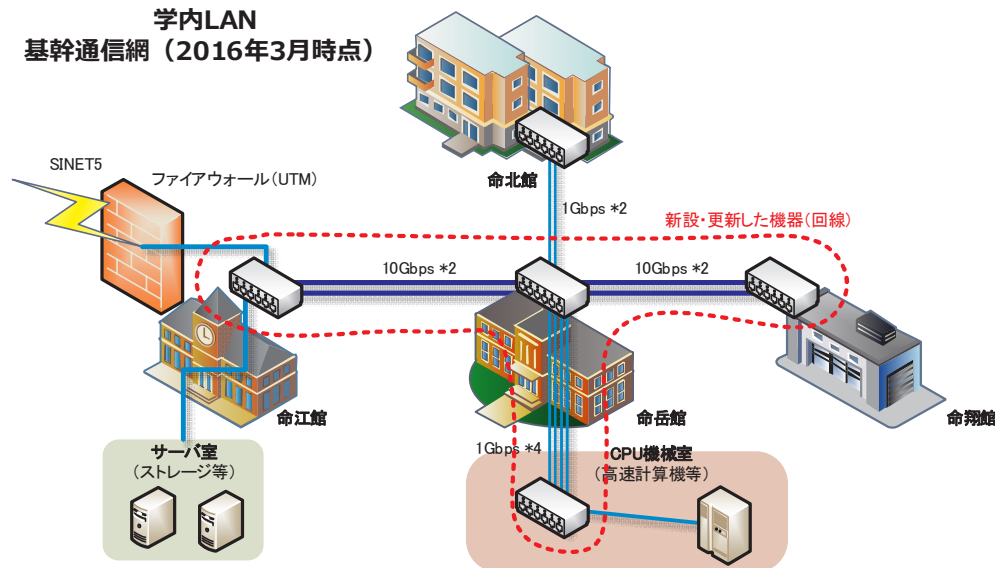
【情報部門】

1 命翔館の新設に伴う学内 LAN 環境の整備

2016 年 3 月に竣工した命翔館の LAN 環境の整備を実施した。既存の学内 LAN と命翔館と接続するためには、命江館・命岳館に設置している基幹通信機器(コアスイッチ)の更新が必要であったため、まずは命翔館の完成に先立って 2015 年 12 月下旬にコアスイッチのリプレース、および命江館と命岳館を結ぶ幹線 (光ファイバー) の 10Gbps 化を実施した。将来的な学内 LAN のトラフィックの増加も考慮して、学内 LAN の幹線は 10Gbps の光ファイバーを敷設した。これにより、幹線(命江館-命岳館)は 20Gbps (2 系統で 10Gbps*2) となり、高速な通信環境を構築することができた。

そして、2016 年 2 月に命翔館向けの光ファイバーの敷設 (10Gbps*2) と、命翔館内部の有線 LAN の工事を行った。無線 LAN も既存棟と同じく、全エリア通信可能である。また、アクティブラーニングで積極的に無線 LAN を利用されることを想定して、最新型のアクセスポイント、およびコントローラーを導入した。

学内 LAN
基幹通信網 (2016年3月時点)



2 命岳館、命北館のセキュリティを配慮した通信機器のリプレース

命翔館の LAN 構築と同時期に、命岳館・命北館の研究室エリアの通信機器(認証機能付きフロアスイッチ) 11 台をリプレースした。これは、設置から 8 年以上が経過し、ハードウェア障害の危険性が高くなりつつあることと、研究室への持ち込み PC に対するセキュリティ機能が陳腐化し、最新の環境に適合していないためである。

リプレイスにより、未承認である持ち込み PC の検出がスムーズになり、また承認申請処理も簡素化され、研究室エリアの PC に対するセキュリティが向上した。

3 無線 LAN 環境の更新

バイオ学習ワンダーランドの運用開始と共に整備した無線 LAN 環境の一部リプレイスを 2016 年 2 月に実施した。対象は、大講義室や中講義室 5・6、食堂等、多くの学生が集中するエリアを中心に、アンケート等で繋がりにくいと指摘されていた場所となる。リプレイスの効果は顕著で、例えば大講義室 2 においては、これまで 10 台のアクセスポイントで 300 名の学生の同時運用が限界であったが、現在では 5 台でも全く問題なく通信できている。そのほか、食堂や国際交流ハウス向けの通信でも、良好な通信結果が得られている。

さらに、リプレイスで不要となった大講義室等に設置していたアクセスポイントは、命岳館・命北館の研究室エリアへ移設させた。研究室エリアでは、講義室のような大人数一斉利用がないため、十分運用できると判断した。

ここ数年、学生・教職員のスマートデバイス (iPad 等) の所有率も向上しており、無線 LAN の重要性は高まっているが、2015 年度の整備により学内無線 LAN は必要十分な環境を提供できていると考えている。

○参考：2016 年 3 月時点のアクセスポイント台数：

命江館：22 台 / 命岳館：24 台 / 命北館：21 台 / 命翔館：10 台 / 国際交流 1 台

4 学内基幹サーバ環境の更新

学内情報システムの基幹サービス (下記補足) を提供しているサーバ環境について、2015 年 8 月にリプレイスを実施した。

※補足：電子メール、DNS、WEB サーバ、DHCP サーバ、認証サーバ等、学内情報システムの運営に必要不可欠なサービス。

1 台の物理サーバ上に複数台のサーバを稼働させる仮想サーバ環境 (Hyper-V) とし、サーバ本体も冗長化を図り、物理的なサーバの故障にも耐えられる環境とした。

また、容量不足が顕著であった学内共通のファイルサーバも同時にリプレイスを行い、仮想サーバ環境上にファイルサーバを新たに構築し、運用を開始した。

5 マイクロソフトとの包括ライセンス契約締結

マイクロソフトと包括ライセンス契約 (OVS-ES) を締結し、マイクロソフト製品を学内すべてのパソコンに導入できるようにした。これまでは、ソフトウェアが必要となった都度、必要数を購入していたが、この契約により、学内に設置している教育研究用パソコン、事務用パソコン他において、マイクロソフト製品の追加ライセンス費用は基本的に発生せず、さらに最新のバージョンを使うことが可能となった。

得られた効果としては、ライセンス費の低減だけではなく、最新バージョンを提供することによるセキュリティの向上、パソコンの再利用の促進 (PC 購入費の低減)、ライセンス管理の手間の削減ができた。実績として、2015 年度は、135 台のパソコンにマイクロソフト製品のインストールを行った。

また OVS-ES の無償オプションとして、学生向けに Office365 サービスの提供を行った。本学の学生であれば、在学中に限り Office が無償で利用できるため、金銭的にも大きなメリットがあるサービスである。新入生に対するオリエンテーションにて、本サービスの説明を実施し、「教育・学術情報センター利用ガイド」(学内 Web に公開) において、詳細なインストール方法等を解説している。

【8】IR活動

【IR室】

1 授業アンケートの実施

FD活動の一貫として開学から継続して実施している授業アンケートについて、学部FD委員会との連携のもと、IR室が実施・集計を行った。授業アンケートは、バイオサイエンス学部、及びバイオサイエンス研究科のすべての開講科目で実施し、結果は担当教員に返却し、さらに学内WEBに学生から質問のあった事項について教員からのコメントを付けて公開している。さらに、集計結果は学部FD委員会へ報告し、授業内容の改善等に繋げている。

2 IRコンソーシアム活動

(1) 学生調査の実施

本学が加盟している大学IRコンソーシアムについて、コンソーシアムで提供される大学間ベンチマークを実施するための共通アンケートである「学生調査」を実施した。学生調査は、1年生調査と上級生調査に分かれており、それぞれ全員が必修となる後期の実験(実習)科目にて実施した。

対象学年	実施日	アンケート種別	回答対象者数	有効回答件数	回収率	備考
1年次	10月7日～14日	1年生調査	282	271	96%	自然科学基礎実験II/IIIの授業時間内に実施
2年次	10月1日～8日	上級生調査	295	281	95%	各応用実験の授業時間内に実施
3年次	10月1日～2日	上級生調査	271	258	95%	各専門実験の授業時間内に実施

(2) IRシステムへのデータ登録、ベンチマーキングの実施

2014年度に実施した「学生調査」の結果を、大学IRコンソーシアムが運用しているIRシステム(IRiS)に登録した(2015年5月)。これにより、会員校同士での相互比較が可能となった。相互比較の結果については、2015年11月に実施したIR報告や、後述する「点検・評価報告書」に盛り込むことができ、データの有効活用を行った。

3 IR報告

IR室業務ガイドラインに基づき、本学の教育内容に関する評価・分析を実施し、その結果を「長浜バイオ大学2015年度第1回IR報告」として編纂した。また、本報告に関する説明会を2回実施し全教職員に周知を行った。

第1回	2015年12月22日(火) 13:30～15:30	大会議室
参加者	計16名 (教員8名 職員8名)	
第2回目	2016年1月19日(火) 11:10～12:40	中講義室1
参加者	計40名 (教員11名 職員29名)	

4 2016年度大学評価のための「点検・評価報告書」の作成

2016年度の大学評価を大学基準協会に対して申請するため、申請に必要となる「点検・評価報告書」「大学基礎データ」等、必要書類の作成を行った。特に「点検・評価報告書」の作成は、各章毎に執筆者が異なっているため、大学として統一の取れた読みやすい文章となるよう十分に注意を払って編集を行った。最終的には、自己点検・評価委員長である学長の確認を行い、全117ページとなる「点検・評価報告書」が完成した。

2016年1月に「点検・評価報告書」の草案と共に、大学評価の申請に係る書類の送付

を行った。申請は受理され、2016 年 3 月には、大学評価に関わる書類(「点検・評価報告書」「大学基礎データ」「根拠資料」)の提出を行った(「根拠資料」は電子データで提出)。

【9】施設整備等

1 新棟建設

新校舎(命翔館)を次の3つの目的をもって2015年6月18日に起工し、2016年2月29日に竣工した。

- ・「予防医学の担い手」の養成を目指す、臨床検査学プログラムの核となる実習室・実験の整備
 - ・市内の児童・生徒の理科教育への興味・関心を高め、理系人材の育成を促進する場として、「長浜学びの実験室」の整備
 - ・アクティブラーニングを活性化し、双方向教育による教育効果を高める学習環境の整備
- 新校舎(命翔館)は鉄筋コンクリート3階建てで、1階と2階に臨床検査学プログラムの実習室2室と研究室を配置、2階と3階には学生によるアクティブラーニングを活性化し、双方向教育による教育効果を高める学習環境の整備として、アクティブラーニングルーム5室を整備した。また1階には、長浜市内の小中学生の理科実験のために「長浜学びの実験室」も整備した。「長浜学びの実験室」に必要な実験機器等の整備については取組に要する経費の一部に対し、長浜市より助成を受けて整備を行った。アクティブラーニングルームに必要な設備については、2015年度(平成27年度)私立大学等改革総合支援事業のタイプ1「教育の質的転換」の選定を受け、取組に必要な設備費について私立大学等教育研究活性化設備整備費補助金に補助申請を行い、助成を受け整備を行った。

2 外壁飾り壁(タイル)シール打替工事等

外壁飾り壁(タイル)のシール(伸縮目地)は築後、10年以上経過すると油分が抜けてシール自体が硬化し、目地の伸縮に対応出来なくなってひび割れや隙間が発生し、雨水が入るとタイルの剥離・罅割れの原因となるため、一期工事(平成15年竣工)の建物(エントランス・命江館・命岳館・体育館・学生寮)は年次計画でシーリングの劣化を補修するための外壁シール打替工事を実施している。2015年度(平成27年度)は命江館・時計塔の外壁シール打替工事实施した。築10年を経過した建物の全面打診等による調査を行った結果、タイルに浮き音が生じており、周辺の罅割れと共に部分的にハラミが見られ、近い将来、剥離落下の発生の危険性が予想されるタイル、軽微な浮き音が生じているが剥離、落下が直ちに発生する危険性は低いが、長期修繕計画策定等に補修計画の立案が望まれるタイルについても可能な範囲(足場部分)でタイル補修を行い、併せて時計塔の高圧洗浄・酸洗も実施した。

3 DNAシーケンシング解析システム・高速液体クロマトグラフィーシステムの整備

平成27年度私立大学戦略的研究基盤形成支援事業に地域に根差した研究を目的とした研究プロジェクト「湖北地域の食品産業発展へのバイオサイエンス研究による貢献」の申請を行い、採択を受け文部科学省私立大学研究設備整備費等補助金(戦略的研究基盤形成支援事業に係る研究設備)を受け下記の研究設備を整備した。

(1) DNAシーケンサー Applied Biosystems Model 3500-150

本研究装置は、当該プロジェクトの研究課題でもあるアユ冷水病菌のゲノムDNA、湖北特産魚類のミトコンドリアDNA、有用物質を検出するために作製するレポータープラスミド等のDNA塩基配列を決定するために用いられ、湖北特産魚類の真贋判定技術の開発、脂肪代謝促進物質検出系の確立等の研究に役立てている。

(2) 高速液体クロマトグラフィーシステム

本研究装置は、植物工場で高機能栽培したツブリナに含まれる脂肪酸代謝促進物質を

精製し、その構造を明らかにし、また、清酒酵母と実験室酵母間における代謝産物の違いを明らかにするために、多くの代謝物質を一度に分離して各代謝産物の化学的な特性に関する知見を得るために用いられ、様々な物質の高純度精製に役立てられている。

【10】長浜バイオ大学保護者会

2012年11月1日に発足した「長浜バイオ大学保護者会」は、2015年度に以下の事業を実施した。

1 保護者会定期総会の開催（2015年6月7日）

3回目となる保護者会定期総会が開催され、159名の保護者が出席した。

2 保護者懇談会の開催（2015年6月7日）

保護者会定期総会に引き続き、大学との共催による保護者懇談会が開催され、251名の保護者が出席した。全体説明会では、学長による全学的な教育・研究方針の説明、大学院研究科長による大学院教育およびJABEEプログラムに関する説明、就職・キャリア担当副機構長による就職に関する説明、プログラム責任教員による臨床検査学プログラムに関する説明が行われた。また、学生の自主活動団体であるiGEM Nagahamaの活動について、学生自身による紹介が行われた。グループ懇談会では、テーマ別に分かれ、質問に対する回答を行う形式で、本学教職員と保護者の懇談が行われた。

3 役員会の開催（2015年5月9日、2016年2月20日）

役員会を2回開催し、2016年度事業計画・2016年度予算などの審議を行った。

4 助成事業

学生自主活動（iGEM Nagahama など）、新入生フレッシュャーズキャンプ実施費用、就職関連事業、学生の資格取得費用などに対して助成を行った。

【11】長浜バイオ大学同窓会

本学の同窓会である「命洗会」は、今年度も卒業生全員に郵送による入会の呼びかけを行うなど会員拡大に注力したが、新たな入会者はほとんどなかった。会員数は20名弱に留まって、活動も事実上停止しており、新たな展開が難しい状況であった。

【12】京都高齢者大学

開校3年目である今年度は12講座を開講した。受講登録者は234名で昨年度より82名多かった。新規開講した「芭蕉と旅する『おくの細道』」「京の職人一匠のしごと」「日本の近現代史」「四季の植物園」が受講者の増加に寄与した。

事務局運営では、受講生の中から複数の運営協力者があり活発化した。なお、本学は会場提供（烏丸学舎→河原町学舎に変更）、本学教員の講師派遣、運営費補助等の協力を行った。

以 上